

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第672号 平成26年1月16日

## 日本の未来は明るいか

厚生労働省が2013年3月に行った「若者の意識に関する調査」の結果によると「今の生活は満足」だが、日本の将来については「明るいとは考えていない」と答えた若者が約半数に上っている事が分かりました（平成25年9月11日付朝日新聞他）。

この調査は、日本を支える若者の意識面の特徴を捉え、「平成25年版厚生労働白書」の作成等に当たっての資料を得る事を目的に、15歳から39歳の若年層を対象に行ったものです。

調査項目は、大きくは「現在の生活満足度」と「日本の未来に対する考え」の2項目となっています。

まず、「現在の生活満足度」については、約6割の若者が「満足」、「どちらかといえば満足」と回答しています。

これを職業別でみると、公務員（74.3%）、学生（71.8%）、専業主婦（69.6%）、経営者・役員（69.2%）の満足度が高い一方、無職の62.6%、自由業の58.1%は現状の生活に不満を感じている様です。

生活に満足している人の理由を聞くと、「好きな家族や恋人、友人などがおり、精神的に充実している（55.2%）」「好きな趣味があり、精神的に充実している（17.3%）」となっており、精神的な充実の度合いが満足度に大きな影響を与えています。

次に、「日本の未来は明るいか」について聞いたところ、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」という回答は19%であったのに対して、約半数の45.1%の若者達は未来を「明るいとは考えていない」様です。

その理由としては、「高齢化によって、財政が悪化し、医療や年金等の給付額が下がったり、税金や社会保険料等の負担額が上がったりして、生活が苦しくなる」といった、将来に対する不安が色濃く反映しているといえるでしょう。

そんな風に、日本の未来に悲観的な見方をしている若者達に対して、「日本の未来を良くしようという意欲」について聞いたところ、「仕事や学業をしっかりとやる事で社会に貢献したい（28.0%）」「社会的企業・ボランティア等に参加して直接社会を良くしていきたい（9.4%）」「寄付やチャリティー等を通じて社会に貢献し

て行きたい（6.9%）」となっています。ただ、これら3つを足しても50%には達しておらず、社会を良くするために何かをしたいという主体的な意志を持った若者が少ない事は残念だと思います。

厚生労働省による「若者の意識に関する調査」の結果を総括すると、「不満はあるがそれなりに今の生活に満足している。将来には不安を抱えているが、だからといって、将来の日本を良くする為に積極的に貢献しようとはまでは思っていない。」そんな若者像が浮かび上がって来ます。

こうした若者像に対して、「そんな若者達が担う事になる将来の日本は、一体どうなってしまうのか」と不安を感じる方も少なくないと思います。私も、そうした不安を感じている一人ではありますが、評論家の田原総一郎氏は、「今は悲観論が横行する世の中だが、私は『これからの日本はどうなるのか』と聞かれると、いつも『日本の前途は洋々だ』答えている」と述べています。

その理由について田原氏は

- ・日本人の労働観
- ・日本の技術力
- ・新しい世代が、今育って来た事

の3点を挙げています（田原総一郎公式ブログから）。

日本人の労働観について田原氏は、日本人は、働く事に喜びを見出し、働くことを楽しむ事が出来るという、欧米人とは異なる勤労観を持っていると指摘しています。

また、新しい世代の若者達について、田原氏は、「新しいものを創り出すことに、意欲とエネルギーを集中させている」と述べています。これは、恐らく若者達に対する期待を込めての評価ではないかと思えます。

つまるところ、日本の将来が良くなるか否かは、「将来の日本を良くしよう」という、若者を含めた我々の意思次第とあって良いのかも知れません。

中部大学の武田邦彦教授は「明るい未来が来るという原理原則」という面白い説を述べておられます。それは、「何故100年前より今の方が良い生活ができるのか。それは、日本人の殆どの方が、今日より明日を良くしようと思っているから」であり、だから、誰もが「今日より、少しでも明日を良くしよう」と思えば、必然的に良くなるというものです。武田教授の言説に対しては、様々な批判もありますが、この説には頷けるものがあります。

今の日本は、内憂外患を抱え、厳しい環境にありますが、だからこそ若者達には、将来に対して悲観も楽観もせず、しっかりと自分を見つめ、新しい日本社会の創造の為に能動的に参加して欲しいと願っており、また、期待しています。

（塾頭：吉田 洋一）